

地域子ども・子育て活動支援助成事業 実施報告書（別紙2）

団体名	おいでおいでルーム
-----	-----------

取組の名称	地域社会の拠り所となる実家的居場所提供
-------	---------------------

実施場所	川崎市中原区下新城2-7-15
------	-----------------

対象地域	川崎区・幸区・中原区・高津区・横浜市(鶴見区・緑区)東京都(目黒区)
------	------------------------------------

対象地域の 特色・課題	<p>●「新型コロナ感染」が3年目を迎えこの間に利用者の多くの子どもが生まれた。2023年5月中旬『新型コロナ』改め「コロナ2019」5類移行で名称変更になるも、マスク着用の判断は個人に委ねられ『普通の生活』になるには、社会が変わらなければ難しい。そして、経済や働き方の変化に伴い家庭環境は、母親のモチベーションを下げ、子育ての辛さが不安となって子どもに向けられ、遊びや食事に影響を与えている。例えば午前午後と近隣で遊べるスペースやイベントを探して過ごし、夕方に自宅に帰る生活、また多くの時間ユーチューブ等を見て、視覚からの刺激を受けていた。</p> <p>●『おいでおいでルーム=以下ルーム』という。2023年度20家族が新しく会員となり、その多くが利用中のママからのご縁でつながった。会員の住む地域は、東京都の目黒区や横浜市川崎南部であった。そして何よりの報告は5家族に第二子が誕生したこと。年度をまたぎ2家族に第二子二人が生まれる。二人目の育児は母親の負担が大きく休まる時間がない。そこでルームでは、安心して授乳が出来る環境や、第一子の遊び相手になるなど、意思疎通を 図り助け合い育ちを助長した。特に新会員さんには、異年齢で遊ぶ環境や個人差はあるが場所慣れするまで、できるだけ寄り添うことを大事にした。みんなで食べるランチや遊び散歩等を通して、改めて我が子の成長を見ることが出来たとの声。その喜びが子育ての楽しさになっていると感じた。</p>
	 

●コロナ禍が明けインフルやコロナと共存しながら、コロナ前の日常に戻った感はあるが、居場所提供は感染状況や社会情勢を見極め衛生的な環境の中で、予約システムを利用して5家族限定(キャンセル待ちあり)を続けた。

●地域の子育て支援センターや各施設等の開放、習い事、SNSのイベント情報を得て親子で出かける機会が多くなり、予定がびっしりという利用者の親子が目立ち、親子の関わりより解放感を求めた結果、生活感がなかなか身についていない等、これもコロナ禍の影響とみなし、利用時は子ども中心の遊びや楽しく食べる生活リズムを大事に過ごした。



●利用者の中には、母親自身の育った境遇に苦しみ、我が子に対し自分も何時か同じことをするのはないかと恐怖心から出来るだけ二人にならず外出していたケースや家庭の事情で気持ちの不安が続く母親が、社会とつながってみたいと希望して利用する等、それらの価値観を認め受け入れ見守りながら、プラス思考になるよう手作りランチや大人も子どもも楽しめるイベントを催し、人を含めた環境に配慮した結果、ボランティア希望につながった。

●コロナ禍でやや見えなくなっていた親子関係であったが、今年度の利用者は比較的安定した親子関係であった。年齢的な内訳は、通年制で言うならば2歳児が少なく0・1歳児が多かった。特に0歳児の離乳食に関する悩みはママのストレスとなっていたため、まず元気に育っていること褒め月齢にとらわれず、子どもの食べる力とリズムを大事にすすめた結果、ママが喜ぶほどの意欲的な姿となった。次年度は、2歳児と第二子の0歳児が多くなる見込みである。



	<p>●2022年から2023年に愛知(新1年生)・静岡(2年生に進級)・大阪(1歳児の時)に転勤や転居 2024年5月から幼稚園2歳児クラスに入園する利用者もいた。これらの『特性を持った子ども』のケースは、その後もラインでつながり心理職と共に経過を共有、地域の連携が必要なケースは段取りして事を進めた。どのケースも1回であるが家族でルームを利用日帰り又は宿泊して、日々の不安やその対処法を実践、知識とコツあと多少の覚悟が必要であることを再確認、心の拠り所を得て帰路に就いた。その後の経過でも励ましたり褒めたり地域との連携は続く。</p> <p>※大阪から宿泊で対応した親からのメッセージ(母親が生きづらさを持ち合わせ治療中)帰ってから早速子どもに1日の予定を話し見通しをたてました。お買い物はカレーにすること。お菓子・ガチャガチャはやらない・カレーのお野菜を選ばせる・嫌がるお風呂はカレーをたべてからをすりこみました。</p> <p>そして1日をスタートさせています。結果『今日はお菓子もガチャガチャもないんだよね』と自分から言ってきて驚くほど生活がスムーズ。時々困らせようとするが一貫した態度をするとすんなり切り替えてくれ毎日が楽しくなりました。実家の祖父にも話し協力を得た。児の変化に驚いていますともあった。</p> <p>●ネットからの事前予約システムで5家族が利用、前もって利用者の把握ができ、スタッフやボランティアに利用者対応が共有され、子どもの育つ姿に喜びその喜びがルームの支えになった</p> <p>●0歳児母親の仕事復帰に伴い4月から1歳児クラスに入園した直近のメールが母親から届く。『慣らし保育が始まりました。遊びも給食も2日とも完食ルームでの経験があったからこそと思います。『頑張ります』短いメールの中に感謝と喜びが垣間見られた。</p> <p>●予約者が把握できることで、離乳食の準備・特性を持った子どもへの配慮と理解・見学者への説明・ランチを含めた今日の予定など利用時間を有意義に使い楽しんで利用してもらうためには事前予約システムは要になった。</p>
取組の趣旨・目的	<p>●稼働日数の多かった月は6月の15日であった。その理由として、毎年好評の子どもが喜ぶ親子で作る「梅ジュース」づくり、何年も前の元利用者を含め今年度は32家族が参加。これを続けている理由は、家庭状況や子どもを取り巻くその後の経過が把握できること。就労しながら頑張る姿・必要に応じた寄り添いと励ましのエールはイベント共に更に続く。</p> <p>●対象地域の特色・課題に取り組むためには地域に根差し、専門職や公的機関との連携を図り、事前予約システムを利用して、引き続き風通しの良い温かな環境の中で、個々のニーズに対応子育て&親育てをする。</p>

●コロナ禍が明け稼働日数・利用回数は増えた。実数以外にもルーム活用が年間を通してあった。その内容は、共働きからくる子育て・家族の問題(育児感の相違・父親の無関心やゲーム依存等)・子どもとの関わり(甘やかすと叱りすぎ・しつけ・切り替えの悪さ・8時以降の食事と遅い時間の睡眠等)父親が在宅勤務や10時以降の帰宅であれ、母親にかかる負担は相当なもので、母親の辛さを話す窓口はルームであった。また、仕事帰りに立ち寄り話を聞いてもらえることで、元気を取り戻し笑顔になる親子。個々の事情と利用の仕方は様々であった。元利用者だけではなく現在の利用者も曜日によってはなかなか予約が取れない状況である。予約は、利用日の2週間前の昼12時から、曜日によって5分で予約が満杯になる。(※キャンセル待ちも重なっている。どうしても今子どもの発達に必要な場合に限り利用にする)コロナ禍も明け日常が戻ってきた様子次年度は5家族枠から6家族枠にした。

●子育てに関わる支援はたくさんあるが、子育てに関わる今を支援している現状である。ルームは長年の経験と知識そして、地域の方々に見守られ、利用者との信頼関係を築き続けた関わりを大事にしている。育ちにくさを持っていてもその子どもを認めて、良いところを伸ばし、先々を見通した関わり方を親自身も理解する。親子共に成長できる居場所で、一時的な関わりではなく、乳児から幼児・学童・大人まで、長いロードで育ちを見守り一緒に共感し合える人がいることの安心感がルームにはあることを共有更に居場所の提供は続く。

●ルームは、16年の継続が力となり地道な活動であるが利用者さんあつてのルームであり、子どもは平等に遊び生活できる指針は社会情勢が変化しても変わらない。長い道のりの子育て必要な時に寄り添い何時でも連絡可能な状況下に置いて安心感を保っている。特に学童期になると悩みも思いも深刻になり、ルームの心理職による助言と相談はケースによっては継続される。



●就園前の子どもにも生きづらさ『言葉の遅れ・こだわり・偏食・カンシャク』を持ち合わせたケースの対応は、まず利用者に理解を求め無理強いせずに子どもの気持ちを尊重、みんなから好かれるよう愛情をもって育てていくことを共有した。必要に応じて今年度も療育に繋げ療育に通園しながらの利用になった。
(※療育のソーシャルワーカーがルームを見学、安定している姿に驚く)

●2023 年度利用者の中に第二子の出産が3人(産前産後の心身のケアが必要であることから、保健師等の活用も取り入れる)0・1・2歳児も満遍なく利用予定。家庭での子育ては、親子関係が一方的になり、第一子への負担も大きく不安定になる。そこで、一緒に遊びながら関係を深め、スタッフやボランティアが母親に次ぐ安心の存在になるよう努める。

●先にも記載したが、利用者の第二子誕生は、家庭や社会的な要因があるがまずルームで得られる安心感と心と体の栄養になるランチであること。束の間の安堵感は、何物にも代えられないとママたちから寄せられたメッセージであった。その環境下で、自分の弟や妹であるように優しいまなざしで見守り哺乳や離乳食状況を見てままと遊びに活かしている。家庭では見られない光景が利用者・ボランティア・スタッフの癒しになって循環している。特に2歳児の女子は関心が強く頼もしく育ちあった。



実施内容・実施スケジュール

《活動内容》

●実施期間：年間を通して実施

●実施場所：自宅開放「おいでおいでルーム」

1・2階フローア居場所として提供

(※二階は授乳や睡眠また個別相談として使用した)

●利用プラン

*利用日 毎週月・金曜日を基本とする。都合で曜日変更有
月1回・水曜日幼稚園児の利用日
第3土曜日を新たに開始(※是非にという要望から)
(※4・5月のみ土曜日実施6月からは日曜日にした)

*利用定員 事前予約制 5組限定

*利用時間 10時～13時

(※水曜日11時～14時おやつあり・日曜日10時30分から13時30分)

*利用料金 1人500円(設備費用及び環境整備に充当)

(※損害保険代は別途徴収)

※生後3ヵ月迄無料

*手作りランチ代 大人600円・子ども300円 お弁当持参も可

※離乳食指導は慣らしから準備期迄無料以後は有料

※仕事と育児の大変さから惣菜の取り置きの利用の依頼も入る。

《実施内容》

(1)感染症の社会情勢をみて、親子で楽しむイベントは、通常利用日に行う。

●ミュージックファシリテーターを招き、心が和む音遊び30分程度、参加費は無料但し謝礼として3,000円ルームが負担する。

●年間で6回実施した。謝礼は経費を含めて5,000円支払う。楽器に触れる音をかなでる・楽器に合わせて歌う・リズムで動くなど楽しむことが出来た。



●ワークショップ(材料費は自己負担)年間で4回程度、謝礼として3,000円ルームが負担する。

●今年度は講師の日程調整が難しく取りやめとなった。

●時短で作るお惣菜教室(7・8・12・3月を除く)

要望のあるイベント子育てしながらの食事づくりに活用できる材料選びから

段取りやポイントなどを見て味見して学ぶ。

参加費 1 回 1,000 円 (9 時 45 分～11 時 15 分)

●今年度も季節の行事や食材を大事にして 5 回実施。感染症の状況を見ながら計画した。参加者の希望で日常使いが出来るお惣菜も取り入れた。その後家庭においても作り置きなどするようになった。

●何よりも料理に向かう姿勢が向上、家庭でも『美味しい』と喜ばれている。



(2) 利用状況や子どもの様子を見て、異年齢で遊ぶ日・同年齢で遊ぶ日を設け、それぞれの育ちを促す。

●今年度は、対面で 1・2 歳児のみの利用日を 7・9・10・12・3 月に設けた。その中で心理職も関わり、遊びや生活を観察し全体と個別に助言、子育ての大変さも理解しながら励ましの言葉も添える。参加者から身近に専門職と共有できることが、安心につながるとコメントがあった。

●2 歳児が少なく 0・1 歳児兄弟姉妹が多かった。2 歳児の女子力が逞しく 1 歳児は刺激を受け五感をフルに使い簡単な遊びや生活のルールを覚えた。2 歳児は日頃の生活経験が利用時のごっこ遊びに活かされていた。仲立ちもいないほど楽しんでいて、更に友だちの気持ちを理解し相手に自分の気持ちを言葉で伝え、友だちと遊べる期待感も逞しく育った。

●プランターに春前に植え付けた『じゃがいも』『ミニトマト』時期が来て収穫の喜びも味わう。大事に持ち帰り喜んで食べた様子がメールで送られてきた。



(3) 対面で年間6回発達心理職が子どもの遊びを観察、適切なアドバイスが受けられる機会を設ける。また、必要に応じて個別相談も可とする。※元利用者が幼稚園児や学童になっても個別相談は受けられる。(個別相談は申込制1時間3,000円)

●長年ルームに関わっているからこそ利用者さんに信頼があり、元利用者さんの相談も継続している。今年度は、7・9・10・12・3月に実施。3月は3歳児・学童2件の3家族が個別相談した。

(4) 食育の推進

●アレルギー児も母親に必ず確認してもらい対応する。

●食育は、食品の感覚過敏児も含めて、無理強いしない・食べる気持ちを尊ぶ・好きなものがあればそれでいいとする。

●離乳食は、発育を重視し月齢にこだわらず、食べようとする意欲と舌の動きを見ながらすすめる。指導料は1回300円

●元利用者に食行動(ミルク飲みの飲食)と感覚過敏を持ち合わせ保育園入園(1歳児クラス)のケースである。その後もルームに日曜日利用しながら、みんなと一緒に座り無理強いせず、なめる程度の量をランチ皿で提供(無料)を続けたその後『なめ食べ』する食品が少し増え3月前にルームで初めてカレーを自分から食べた。これも『のんき・こんき・げんき』を合言葉にしてきた結果である。次年度は2歳児クラスまだまだ見守る役目をこなしていく。

●食育は『好きな食材があれば良い』を掲げ、楽しんで食べることを大事にした。ルームの味が大好きで、どの子も好きな物を『お替り頂戴』と自分から催促2回まではかなえた。予約システムを見て子どもの好物を用意できたこともランチを楽しむ要因になった。

●離乳食は第一子が二人・第二子が五人、年度をまたぐ子どもは当面二人舌の動きを見ながら更に手づかみ食べの完了期まで1対1の対応で進めた。離乳食は主食・副菜・汁ものを用意、家庭との違いがないよう母親が味見をして味と食品の形状を確認した。ほとんどの子どもは1歳を迎えるころにはみんなと同じテーブルに座り、姿勢を保ち自ら手づかみで完食する。頼もしい0歳児であった。

	<p>(4) SNS を利用した情報配信手段として、FaceBook【オンライン子育てサロンおいでルーム】、Instagram【おいでおいでルーム】に加え、新たにLINE 公式アカウントを取得し 2023 年 4 月より運用を開始。現会員の情報アクセスビリティの向上に加え、イベントのお知らせや、予約枠状況、惣菜販売についてなど、タイムリーな情報配信が可能となった。</p> <p>●SNS 会員数等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FaceBook【オンライン子育てサロンおいでルーム】 会員 75 ・Instagram【おいでおいでルーム】 フォロワー102 ・LINE 公式アカウント【おいでおいでルーム】 ターゲット 68 		
参加者の年代	未就園児とその保護者	定員 (1 回あたり)	5 家族限定
実施頻度	週 2 回(月・金) 月 1 回(水) 第 3 土曜日(4・5 月) 6 月から日曜日に変更	活動日数 (年間)	131 日
スタッフ体制	<p>代表 1 名・スタッフ 1 名 ボランティアママと他 4 名(うち 1 名育児休暇) サポーター 2 名</p>		
連携する団体・ 連携の手法	<p>●二年間会議や研修がオンラインでの参加か中止になったが、徐々に対面での参加も可能になり、中原区の子育てネットワーク・ボランティア部会の再開を待ちたい。</p> <p>●対面での会議や研修になりルームは積極的に出席した。参加することで子育てに関する情報がより身近になり、参加者からルームを見学したいとの要望があり 2 件ほど受け入れた。また、中原区子育てグループ・サークル紹介にも協力取材を受けた。</p> <p>●子どもを取り巻く問題の解決は、緻密な電話連絡で連携を図り共通事項とすることである。子どもの安全と母親の喪失感や孤立に注意をはらい、支援が必要と思われた時は、躊躇せずに関係機関と問題解決にあたる。</p> <p>●今年度は緻密な連携を共有するケースはなかったが、療育機関に繋げたケースは 2 件、そのうち 1 件親子関係とルームでの遊びを見るために療育センターからの視察も受け入れ意見交換した。また、すでに通園している子どももいて親を通して幼稚園や保育園との連携を図った。</p>		

取組実施により
見込まれた効果

●地域社会の拠り所となる実家的居場所提供は、『楽しかった。また行きたい』の声に支えられ、地域性を大事にしながら個々の想いに合わせできた。

●自宅開放の環境は、利用者にとって心安らぐ場所となり『実家に帰ったようだ』と入会者が言う。親も子も居場所に慣れるのが早く、誰が誰のママなのかわからないぐらい遊んでいた。

●物価高騰の中、コロナ禍以前から値上げもせず工夫しながら、昔ながらの味や素材で作る手作り惣菜『ほっこりランチ』は親も子も楽しみの時間帯になっていた。また惣菜購入は、活動する上で必要な環境整備などにあてた。

●居場所提供が、集団生活を始める前に、子ども同士互いを意識し、いろんな大人たちと関わりながら育っていく子どもたち。一緒に食べて、トラブることで泣いたり笑ったり、赤ちゃんのお世話をしたり、…今本当に必要とされているのは身近に利用できる互いが育ち合う居場所であることを強く感じた。

●ルームは、子育て支援だけではなく、実質的に“親育て支援”の場にもなっている。様々な生活環境、家庭境遇、バックグラウンドを持った保護者は初めての出産・育児を通して多くの事を経験し学ぶなかで不安や疑問を抱える。ルームの利用は、子どもと保護者が一緒に過ごすため、遊びながら他の利用者、スタッフや代表に不安や疑問を直接相談できる環境にある。また、同年齢のみならず、異年齢の他の子どもと関わる事で、自身の子どもの違いを学ぶ機会になっている。また、保護者個人の抱える様々な悩みに寄り添うことで、育児へのプラスの影響が出ている例も挙げられる。そして、寄り添いや相談は、保育園、幼稚園、学童になっても続く。

